

「慟哭」の通奏低音

音楽ジャーナリスト・エッセイスト 小澤幹雄

一九九二年から始まったサイトウ・キネン・フェスティバル（SKF）は、桐朋学園音楽科の創設者の一人斎藤秀雄先生の教えを受け今や内外で活躍する音楽家たちが、兄小澤征爾たちの呼びかけで毎年夏、松本に集まって開催される世界に稀有な音楽祭である。

サイトウ・キネン・オーケストラの結成当初から身近に関わってきた僕は、松本の「市民タイムス」紙上にSKFを紹介するコラムを音楽祭の第一回の年から書き続けてきた。

秋山泰則さんに初めて出会ったのもそのころで、市民タイムス「リレーコラム」の執筆者たちが一堂に会した楽しい宴席であった。年齢も一つ違い、小学校低学年での戦争体験など共通点もあつてすぐに心が通じ合い話が弾んだのを覚えている。

昭和十三年（一九三八年）東京浅草に生まれた秋山さんは、昭和二十年三月十日未明アメリカ軍B29爆撃機の大編隊が深川、城東、浅草地区をじゅうたん爆撃した所謂「東京大空襲」を体験した生き証人である。一夜にして首都の三分の一が焼け十万人以上が貴い命を落とした、まさに無差別大量虐殺であった。幼い秋山さんをはじめ家族の方々がこの夜灼熱の猛火の中どんな体験をしたか、我々の想像をはるかに超えていよう。

同じころ、浅草とは遠く離れた東京の西の街立川に住んでいた我々一家も連日激しいアメリカ軍の空襲にさら

されていた。近くに日本の軍事施設があったため、B 29の編隊は住宅地にも爆弾の雨を降らせ、七歳だった僕は庭に掘った小さい防空壕の中で耳をつんざく爆撃音におびえる毎日だった。ある時、水が無性に飲みたくなつた僕とすぐ上の兄征爾の二人が防空壕をそつと抜け出し台所の外にあるポンプ井戸で水を汲んで飲もうとした瞬間、突然低い雲間から現れた小型のグラマン戦闘機が超低空で僕たち二人をダダダッーと撃ってきたのである。腰を抜かした二人のすぐ脇の畑に白い土煙がパパッと上がったのが見えた。我に返った僕たちは母が身を乗り出して泣き叫んでいる防空壕まで這うようにして戻つていった。

また一度は、僕たちの真上でB 29が日本の戦闘機に体当たりされて撃墜され無数の破片が燃えながら落ちてきたその少しあとに、一人の若い米兵が落下傘で音もなく

降りてきたことがあった。G Iカットのその若者を街の大人たちが近くの諏訪神社の大木にキリストのようにはりつけ、寄つてたかつて棒で殴り殺してしまつたのだ。少し離れた木の陰でその地獄のような光景をふるえながら見ていたが、僕にとってそれが初めて見た外国人だった。戦争は善良な市民を集団で狂気にさせるものである。秋山さんが体験した大空襲に比べれば、僕の体験なんてちつぽけなものかもしれない。しかしあの時から今日まで、戦争に対する憎悪、人が人を殺してはならない、戦争は二度としてはいけないという気持ちは強く持ち続けている。

「戦争が無いことが平和なのではなく

平和は戦争をさせない人間の心にある……」

〔高雄の空〕

「口を開けたまま炭になってしまった人の

伝えたかった言葉を聴かなくてはならない」

(「百キロ爆弾のそばで」)

「静かに次の戦争が窺っている」

(「失われるもの」)

秋山泰則さんの詩には、「反戦平和」を祈る「慟哭」
が、バッハの通奏低音のように聞こえてくる。